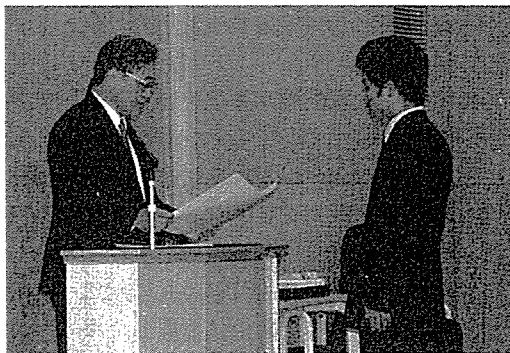


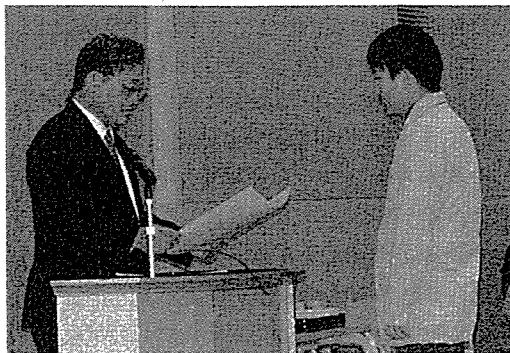
学内広報

2002. 10. 23
東京大学広報委員会

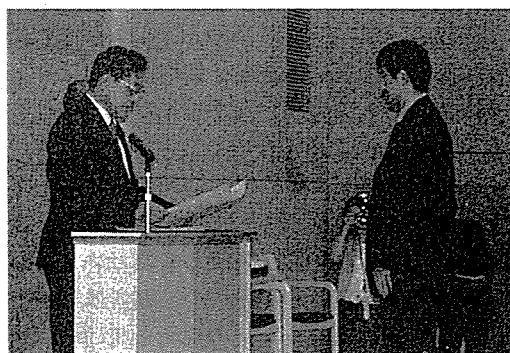
第1回「東京大学総長賞」の授与式行われる



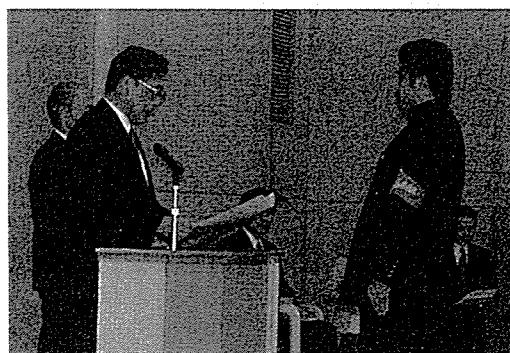
山田 淳さん



小野正嗣さん



和 愛軍さん



応援部主将 石橋悠司さん

(3ページに関連記事)

目次

特別記事	2
小柴昌俊名誉教授からノーベル物理学賞受賞についての挨拶、小柴昌俊名誉教授ノーベル物理学賞受賞に対する祝辞	
一般ニュース	3
第1回「東京大学総長賞」の授与式行われる、総長の海外出張	
部局ニュース	4
平成15(2003)年度大学院法学政治学研究科修士課程入学試験について、「夏休み航空宇宙工学教室」の開催、今年も引き続き東海村の原子力工学研究施設で抜き打ちの事故通報訓練実施される、東京大学駒場図書館開館記念式典・祝賀会が開催される、北海道常呂町で第5回東京大学文学部公開講座を開催、大学院新領域創成科学研究科で平成14年度10月期学位記授与式・平成14	

年度10月期入学式挙行される、平成15(2003)年度大学院学際情報学府修士課程入学試験結果について、第9回医科学研究所留学生・外国人研究生等との懇談会開催される、自衛消防活動審査会報告、物性研究所一般講演会開催される、空間情報科学研究センター第5回シンポジウム開催される

掲示板	11
御殿下記念館開館利用時間帯について、公開講座「東大病院はどこへ行く～法人化と医療改革前夜の国立大学病院～」、第23回東京大学農学部公開セミナー、コンピュータ・ネットワーク利用セミナーのお知らせ	
計 報	
(藤島亥治郎名誉教授、本城和彦教授) ...	13
広報委員会	15
淡青評論「EU、ティコ・ブラーエ、憲法」	16

≡ 特別記事 ≡

小柴昌俊名誉教授からノーベル物理学賞受賞についての挨拶

今日、会見を行うために、東大まで出てきたのには、東大に恩義を感じていたからです。その恩義とは、今年3月の東大の理系の卒業式でも話しましたが、東大理学部をビリで卒業した者を教官として採用し、教授にまでしていただいたというのは、あまりないことだと思いますし、東大で夢見てきた研究をサポートし、その夢を実現させてくれたことに恩義を感じていました。

(研究生活で)一番うれしかったことは、カミオカンデ、スーパーカミオカンデの実験でよい結果が出たことです。また、これからも2つくらいはすばらしい成果が出てくるでしょう。

さらにカミオカンデの頃の若い研究者が成長し、良い成果を出し、賞を獲っていることは、大変うれしいことです。

(2002年10月8日小柴昌俊名誉教授ノーベル物理学賞受賞記者会見での挨拶より)



記者会見の様子

小柴昌俊名誉教授ノーベル物理学賞受賞に対する祝辞

東京大学総長 佐々木 毅

今回、本学名誉教授でいらっしゃいます小柴昌俊先生が、長年にわたる優れたご研究の成果が世界的に評価され、ノーベル物理学賞を受賞されましたことは、東京大学を代表しまして心からお祝いを申し上げたいと思います。

今回の受賞は、先生の長年にわたるご研究の賜物であることはもちろんありますが、同時に東京大学における知的活動の水準の高さが、世界的に評価されたということにつきまして、我々東京大学一同としても喜びにたえないところであります。昨年、わたくしは、先生と一緒に神岡のスーパーカミオカンデを訪問ましたが、その

後皆様ご案内のように事故等がございまして、その後施設の修復時に大学としても各方面のご援助を賜りながら努力をしてまいりましたが、そうした苦労も先生の受賞によりまして、すべて吹き飛んだという感じであります。

今後とも先生にはご健康に十分留意され、また、これからも後輩の激励と指導に、なお一層ご協力賜りますよう、東京大学を代表してお祝いを申し上げる次第でございます。

先生、今日はおめでとうございました。

(2002年10月8日小柴昌俊名誉教授ノーベル物理学賞受賞記者会見における総長祝辞)

大学院理学系研究科長・理学部長 佐藤勝彦

2002年度のノーベル物理学賞を理学系研究科名誉教授の小柴昌俊先生が受賞されました。理学系研究科を代表し心から小柴先生にお祝い申し上げます。

この度の受賞は、1987年2月に起こった超新星からのニュートリノを神岡鉱山に設置したカミオカンデによって検出したことにより、ニュートリノ天文学という新たな研究分野を開拓した業績が高く評価されたことによります。カミオカンデは小柴先生をセンター長として理学部に設置されていた素粒子物理国際研究センターが建設運用していたもので、この成果は同時に理学部・理学系研究科の成果であるといえます。この成果がノーベル賞に値するものであることは、超新星ニュートリノの検出直後から、広く認識されていたことであり、今まで15年間待ち続けていた受賞であったといえましょう。

この成果の後、小柴先生の後継者は当初の目的の一つである太陽ニュートリノの観測を続けその量は理論値の半分程度しかないことを明確に示し、標準理論と観測にははっきりと矛盾があることを明らかにしました。さらに小柴先生の後継者たちはカミオカンデを発展させたスーパーカミオカンデを建設し、太陽ニュートリノの観測と大気ニュートリノの精密な観測によりニュートリノが質量をもち、異なるタイプのニュートリノと入れ替わりながら振動することを明確に示しました。このように小柴先生の研究は大きく発展し、さらにノーベル賞の対象となる研究成果があがっております。

理学系研究科は2002年4月に理学系研究科憲章を定め、「自然界の構造や進化を明らかにし自然界に働く法則や基本原理を探求し、人類社会を支える技術の基礎を築くと共に文化としての科学を創造する。」ことを謳っています。小柴先生の受賞は、すぐ実利につながる応用的研究を重視し基礎研究を軽視する傾向が強い世情において、理学系研究科の教職員、学生のみならず、基礎科学を研究、また学ぶものにとって、この上もない励ましとなりました。小柴先生は基礎科学に重要さについてしばしば発言されておりますが、今後とも基礎科学分野のリーダーとして広く社会に発信していただきますようお願い申しあげます。

最後になりますが先生のますますの健勝を祈念いたし

ます。

素粒子物理国際研究センター長 駒宮 幸男

先生の受賞に対し心からのお祝いを申し上げます。

先生が「ニュートリノ天文学」という新しい学問分野を創成された事に対する当然の評価であると考えます。ニュートリノは弱い相互作用しかないので受賞が遅れたというのが研究者の間でのもっぱらのうわさです。

1987年2月、16万光年のかなたにある大マゼラン星雲の超新星1987Aの大爆発が生じ、そこからのニュートリノを、先生が考案されたKamiokande測定器が把えました。それは小柴先生が東大を退官されるわずか一ヶ月前のことであり、先生がこのような「幸運」を呼び込まれたことは我々には大変な驚きでした。あたかも、宇宙が先生の直観力に屈して、16万年後の退官にまにあうように時空を超えて爆発のタイミングを微調整したかの如くに見えました。

その後神岡での実験はSuper Kamiokandeへと発展し、大気ニュートリノと太陽ニュートリノの観測によりニュートリノが質量を持つことを発見するなど、さらに多くの成果を生み出しました。

一方先生は、1960年代のおわりから、当時は海のものとも山のものともわからなかった高エネルギーの電子・陽電子衝突実験の重要性を直観的に見抜き、その道の大家であったブトケル教授をロシアのノボシビルスクに訪ねられました。

1974年には海外において国際協力で電子・陽電子衝突実験を行なうため本センターの前身である高エネルギー実験施設を新設されました。これが、先生や故折戸周治教授の努力によりドイツの電子シンクロトロン研究所(DESY)におけるDASP、JADEの国際協力実験、さらにCERNにおけるOPAL実験へと発展しました。これらエネルギーフロンティアにおける一連の実験では、グルーオンの発見、素粒子の世代数の決定など多くの成果をもたらしました。先生が開拓されたこの道は、現在CERNで建設中の加速器LHCを用いたATLAS実験、そして我国での建設を目指している国際プロジェクト電子・陽電子リニアコライダーJLCへとさらに大きく発展しております。

先生は学生や若い研究者に対して、「将来大きく育つかもしれないアイデアのタマゴをいくつもかかえてあたためておけ。そして、タマゴを時々取り出して、機が熟したかどうか気をつけていなさい」という事をよく言っておられました。先生のかかえられていたタマゴはいくつも孵化して、大きな学問へと成長しました。

これからもお元気で、御指導くださります様お願い申しあげます。

≤一般ニュース⇒

第1回「東京大学総長賞」の授与式行われる

10月8日(火)に農学生命科学研究科弥生講堂において、約300名の教職員・学生が参加して、今年度から新設された学生表彰規程に基づき「東京大学総長賞」が、佐々木総長から次の3名、1団体に授与された。

本表彰は、本学学生を対象として、学業、課外活動、社会活動及び国際交流等に貢献し、本学の名誉を高めた者(団体)に授与し、更なる活動を期待するものである。

授与式は、坂口学生部長の進行で開式され、林 選考委員会委員長から選考結果の報告の後、総長から受賞者に対し表彰状及び記念品が授与され、お祝いの挨拶があった。

引き続いて、各受賞者から今回の受賞に関するプレゼンテーションの後、総長を囲んでの懇談会が持たれた。最後に今回受賞団体の運動会応援部のリードで、東京大学応援歌「ただひとつ」を全員で齊唱し、盛況のうちに終了した。

山田 淳 経済学部3年 最年少七大陸最高峰制覇
小野 正嗣 総合文化研究科 第15回三島由起夫賞受賞
博士課程3年
和 愛軍 農学生命科学研究科 社会活動及び国際交流
博士課程3年
運動会 応援部 本学における課外活動支援に貢献



総長を囲んで左から和 愛軍、山田 淳、小野正嗣、応援部主将石橋悠司の各受賞者

総長の海外出張

平成14年10月27日(日)～平成14年11月1日(金)

ルンド大学、ストックフォルム大学、ウプサラ大学との大学間学術交流協定調印式出席及びスウェーデンの学術機関訪問(スウェーデン)

≤ 部局ニュース ⇒

平成15（2003）年度大学院法学政治学研究科修士課程入学試験について

平成15（2003）年度大学院法学政治学研究科修士課程（研究者養成コース・専修コース）の入学試験は、9月3日（火）～9月5日（木）に筆記試験が、10月1日（火）～10月4日（金）に口述試験がそれぞれ行なわれ、10月11日（金）に合格者（入学許可内定者）が発表された。

なお、志願者数、受験者数及び合格者数は以下のとおりである。

コース		研究者養成コース			専修コース				
選抜の種類		A	B	C	計	一般	職業人	外国人	計
志願者数	本学出身者	55	2		57	66	5	1	72
	他大学出身者	66	20	7	93	182	42	22	246
	計	121	22	7	150	248	47	23	318
受験者数	本学出身者	51	2		53	59	5	1	65
	他大学出身者	57	19	7	83	159	41	22	222
	計	108	21	7	136	218	46	23	287
合格者数	本学出身者	24	1		25	23	4	1	28
	他大学出身者		1	2	3	11	29	7	47
	計	24	2	2	28	34	33	8	75

※研究者養成コースにおける選抜の種類

A：筆記試験（外国语1科目、専門科目3科目）、口述試験等により選抜。

B：本学法学部卒業（見込）者及び外国人特別選抜（C選抜）該当者を除き、出願時に小論文を提出した者を対象とする。学業成績、小論文、筆記試験（外国语1科目）、口述試験等により選抜。

C：外国人特別選抜。筆記試験（外国语1科目、専門科目1科目）、口述試験等により選抜。

（大学院法学政治学研究科・法学部）

「夏休み航空宇宙工学教室」の開催

本郷キャンパス内で「夏休み航空宇宙工学教室」を開催した。この企画は文部科学省の大学改革推進費「理工学系教育推進経費」により8月21（水）、22日（木）に実施されたものである。

21日（水）は航空宇宙工学科の研究室見学会と記念講演会で、学科の研究内容の紹介と、航空宇宙工学の歴史と学生による人工衛星開発の状況が説明された。22日（木）は小中学生を対象とした紙飛行機とペットボトルケットの工作教室と飛行記録会であった。飛行原理の説明の後、模型を作成し、体育館とグラウンドにおいて飛行時間の記録を計測した。両日でのべ170名の参加があり、夏の大空を子供たちの作った紙飛行機とペットボトル



航空宇宙工学教室での様子

ルは見事に飛んだ。

（大学院工学系研究科・工学部）

今年も引き続き東海村の原子力工学研究施設で抜き打ちの事故通報訓練実施される

7月も半ば、17日（水）は三菱マテリアル、19日（金）は日本照射サービス、22日（月）は核物質管理センター、24日（水）はレーザー濃縮技術研究組合……あと残り7事業所。茨城県が県内の21原子力事業所に対し県職員立会のもと日時や発災場所等を知らせないで時間外に抜き打ちの事故通報訓練を行っている。まだ、原子力工学研究施設には来ない。7月は、教職員の誰もが極度の緊迫感を懷いて過ごしていた。ついに、来訪した県職員より当直者が通告文「7月30日（火）朝8:01、東京大学大学院工学系研究科附属原子力工学研究施設 重照射損傷実験棟1階静電気加速器室において、火災報知器が発報した。」を受け取った。速やかに緊急作業団発動を行った。第1報のファックス文を送信した。それから一斉に、防災安全マニュアルに従い、近隣市町村も含めて約30ヶ所に第1報から第4報まで繰り返し行った。市町村も通報訓練期間は少ない担当者で21事業所を順番に相手にしており大変である。

昨年行われた通報訓練では、いくつかミスがあったの

で、今回ホワイトボードと大型ディスプレイへ経過を表示することにし、情報の共有化を図ったのが有効であった。今回の講評は、「指揮命令がしっかりとしており、少人員でよく機能していた。」と、ほぼ満点に近い褒めの言葉を戴いた。今年でこの通報訓練は、3年目を迎えた。規模の小さい原子力事業所である当研究施設が、1,000人を超える研究所や出力（放射性物質量）が100万倍以上大きい原子力発電所と規制・協定等通報訓練だけでなく様々な点で同列に扱われるにはつらいものがある。

ここまで訓練では、臨界事故想定はない。おそらく最後までないかも知れない。臨界事故を想定されると、首相官邸まで連絡しなければならない。JCO事故の後、全国の原子力関係の事業所や自治体では様々な施策がとられてきている。最近も、緊急被ばく医療について青木芳朗先生（元医学部教授・前原子力安全委員）が、来訪されご説明を伺った。いずれにしても、8月中は訓練がない。緊張の糸がほころび始めた。

本年2月12日（火）深夜、水戸・東海に震度4の地震が観測された。各管理部職員等17名が駆けつけ点検を実施した。その後も、県との協定に従い結果の報告を行った。この時は、特に異常が認められなかったため、第1報で済んだ。6月14日（金）日中にも似たようなケースがあった。抜き打ちにしろ、地震にしろ突然事象が起る。手際が良いと自負するつもりはない。日頃の訓練だけで出来るものでもない。この他にも、5月29日（水）当研究施設原子炉棟を発災場所とした東海ノア協定に基づく通報・召集訓練が行われた。又、9月30日（月）には、茨城県主導で大洗町及び茨城県原子力オフサイトセンター（3月25日開所）を中心に原子力防災訓練が予定されている。

さて、当研究施設の近況はと言うと、昨年9月に発生した米国の同時多発テロでは、大きな影響を受けた。昨年10月下旬から今年5月下旬まで茨城県警察本部機動隊による24時間常駐での厳戒体制が敷かれた。毎日、機動隊員のチェックを受け出入りした。当研究施設としても大学上層部の配慮により、外注警備による夜間の巡回強化、日中の正門入口のチェック強化を行うとともに、ハード面で周辺監視の強化を図った。現在も機動隊によ



茨城県機動隊による正門付近での警備（昨年10月）

る警戒は継続している。

当研究施設では、訓練や管理業務にのみ明けくれていいわけではない。研究用原子炉「弥生」、ライナックや短パルスフェムト秒レーザー設備等大型設備を使用し、原子炉や加速器を用いた学部学生のための実習、学内を含む全国の国公私立大学等の研究者との共同研究や大学院学生の研究・教育活動を行っている。最近は、競争的資金を導入したプロジェクト研究も多くなっている。当研究施設で開発した高温高性能軽水炉の概念が米国エネルギー省の第4世代原子炉に選定された。ライナック関係でも「小型加速器開発事業」研究が活発に行われている。

原子力の世界では「安全文化」を標語に安全向上を図ってきている。当研究施設での具体的な「安全文化」への取組みは、原子炉や放射線発生装置等の原子力に関する設備機器類を運転維持管理し、利用するためハード面やソフト面を含む高度の安全管理システムを構築し、それを日々改善維持していく努力を行っている。安全文化の要はもちろん人です。当研究施設は、開設以来30年以上にわたり一貫して安全文化の醸成に努めてきており、今後も引き続きこの実績を継続することが、研究教育活動を行う上で重要であると考えている。益々、高い安全文化が要求される昨今、教職員等がベクトルを合わせて力を発揮し、邁進して行きたい。

（大学院工学系研究科附属原子力工学研究施設）

東京大学駒場図書館開館記念式典・祝賀会が開催される

大学院総合文化研究科・教養学部は、東京大学駒場図書館の開館を祝い、10月2日（水）午前10時から記念式典と祝賀会を開催した。

記念式典では、はじめに古田研究科長が挨拶し、「学習図書館機能と研究用図書館機能を統合した駒場地区の中核となる図書館として完成し、図書館の名称も駒場図書館とした。ニューメディアの情報機器設備の充実、書架の間隔を車椅子での利用ができるよう広げるなどのバリアフリーへの対応、建物中央部に三階から五階までの吹き抜けを設け、自然の光と空気対流を利用するなど環境に配慮すると共に省エネルギー対策などの面で特徴を有している。また開館時間を延長するなどサービスの充実をはかっている。21世紀にふさわしい大学図書館となるように努める」と述べた。

続いて佐々木総長が、祝辞で「東京大学が『世界の東京大学』になるために、本日完成した駒場図書館を含む東京大学の図書館が、21世紀にふさわしい学術情報センターとしての機能を発揮することが強く求められている。引き続きの努力に期待する」と述べた。また、遠山文部科学大臣から祝辞をいただき、続いて山田施設部長の工事概要報告、古田研究科長による関係業者への感謝状贈呈の後、同図書館の開館を記念してテープカットを行い、

閉式した。

式典の後、施設見学に移り、館内を見学した。

祝賀会は、竹内駒場図書館長の挨拶に続き、蓮實前東京大学総長、萩原文部科学省大臣官房文教施設部長から祝辞をいただき、廣渡東京大学副学長・東京大学附属図書館長の発声で乾杯した。祝宴は、華やかで和やかに進み、木畠本研究科評議員の謝辞により閉会した。

また、出席者は、式典及び祝賀会あわせ、約200名となり、文部科学省からは大臣をはじめ萩原文教施設部長、舌津計画課長、学内からは、総長、副学長、事務局長及び関係教官など多くの方々の出席を得て終始盛会のうちに終了した。

なお、9月30日（月）に関係者による「東京大学駒場図書館」看板上掲式を行った。式には古田研究科長、鈴木・木畠両評議員、竹内駒場図書館長、有岡事務部長をはじめ学部内関係者が出席、古田研究科長の挨拶の後、図書館の正面玄関に看板を掲げた。



祝辞を述べる遠山文部科学大臣



看板を掲げた古田研究科長等
(大学院総合文化研究科・教養学部)

北海道常呂町で第5回東京大学文学部公開講座を開催

文学部では、2000年以来、文学部附属北海文化研究施設の所在する北海道常呂町において、「ところ公開講座」を開いており、第5回目を10月4日（金）に、常呂町・常呂町教育委員会との共催で、北網広域圏組合の協賛をえて、開催しました。道民カレッジ連携講座にもなっています。

今回は、従来からおこなわれている一般向け以外に、初めて高校生を対象とした高校講座を道立常呂高校にて実施した。全校生徒を前に、講師の大学院数理科学研究科の岡本和夫教授が、「大きな数はどれくらい大きいか」というタイトルで、普段考えたことのないような大きな数、小さな数を例に、数学の楽しさ、有用性について熱弁をふるわれました。

夜の一般向け公開講座は、従来どおり常呂町中央公民館大講堂でおこなわれた。約90名という多くの方が町内外から参加され、盛会でした。英語、数学という、今までになかった分野の先生方の出講で、いつも以上に熱気のこもった講座となりました。

井原久敏常呂町長、ついで佐藤慎一文学部長の挨拶で始まり、最初は、昼の講座に続いて、岡本教授が、「数学の伝統と現代」と題して、数学が文明の発達の上でいかに歩んできたかを身近な暦や時間を例にして、数学が人類の歴史の中でいかに力を発揮してきたかを話されました。続いて、英文学の高橋和久教授が「英語と英文学夜話（タヌキ）」と題して講演しました。日本人の多くの人が英語を難しく感じるのなぜかをさまざまな例を引きながら説明され、英語というものの特質を分かりやすく説明され、英語とのつき合い方について話されました。

受講生にはいつもどおり、修了証書が手渡されました。



公開講座の様子

(大学院人文社会系研究科・文学部)

大学院新領域創成科学研究科で平成14年度10月期学位記授与式・平成14年度10月期入学式挙行される

大学院新領域創成科学研究科では、平成11年4月創設以来3月・4月の学位記授与式・入学式以外に、年度途中の9月・10月に学位記授与式・入学式を行っている。

平成14年度9月学位記授与式は9月30日(月)に、10月入学式を10月1日(火)に理学部旧1号館2階250号講義室において挙行した。

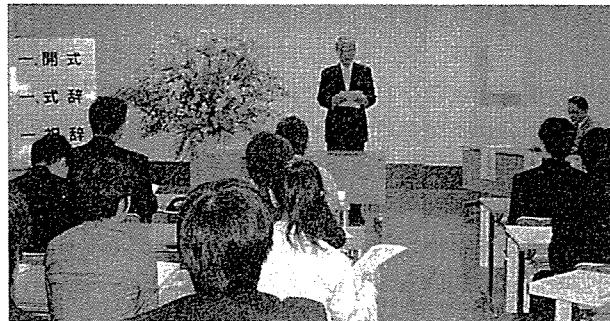


学位記の授与

共に大久保教授の進行により行なわれ、井上学務課長開式挨拶、河野通方研究科長式辞のほか、3(基盤・先端生命・環境)研究系長から各々祝辞が述べられた。

学位記授与式は、河野研究科長から修士課程修了者12名に対し直接学位記が授与され、また、入学式は修士課程25名博士課程10名の入進学者に対し行なわれた。

河野研究科長の学位記授与式・入学式式辞は、大学院新領域創成科学研究科ホームページ(<http://www.k.u-tokyo.ac.jp/j/index.html>)に全文掲載されていますので、ご覧下さい。



式辞を述べる河野研究科長

(大学院新領域創成科学研究科)

平成15(2003)年度大学院学際情報学府修士課程入学試験結果について

大学院学際情報学府は、平成15(2003)年度修士課程

入学試験一次試験(筆記試験)を8月27日(火)に、二次試験(口述試験)を9月2日(月)及び3日(火)に実施し、9月6日(金)に合格者を発表した。志願者数及び合格者数は、下表のとおりである。

H15(2003)年度東京大学大学院学際情報学府修士課程入学志願者・合格者数

コース	受入予定人 員	日本人/ 外国人	志願者			合格者		
			本学	他大学	計	本学	他大学	計
学際情報学	約24	日本人	25	53	78	18	13	31
		外国人	1	6	7	1	2	3
		計	26	59	85	19	15	34
実践情報学	約24	日本人	3	39	42	2	18	20
		外国人		7	7		4	4
		計	3	46	49	2	22	24
合 計	48	日本人	28	92	120	20	31	51
		外国人	1	13	14	1	6	7
		計	29	105	134	21	37	58

(大学院学際情報学府)

第9回医科学研究所 留学生・外国人研究生等との懇談会開催される

今年で9回目の開催となる医科学研究所主催「留学生・外国人研究生等との懇談会」が10月4日(金)午後6時から開催された。

現在、本研究所には、多数の留学生・外国人研究生等が在籍しており、そのうちの6ヶ国24名と所長以下関係教職員22名の計46名が出席した。

懇談会は、渡邊すみ子助教授(国際交流委員長)の開会の辞、新井賢一所長の挨拶後、中村義一副所長の乾杯の発声により歓談に入った。

今年は、美味しいイタリア料理を賞味しながら留学生同士の相互交流及び日本人教官との親睦と理解を深める交流に十分な時間を設けたため、例年にも増して有意義な歓談が始終和やかな雰囲気の中で進められた。

8時過ぎ、楽しい余韻を残すなか、参加者全員による記念写真を撮影後、田中廣壽助教授(国際交流委員)の閉会の辞により散会した。



懇談会の様子



参加者全員による記念撮影

(医科学研究所)

自衛消防活動審査会報告

目黒消防署主催の平成14年度自衛消防活動審査会が9月12日(木)ダイエー碑文谷駐車場にて、男子隊29隊、女子隊8隊が参加して行われた。駒場リサーチキャンパスからは1)防災センター隊 2)生産研研究室技術官隊 3)生産研事務部男子隊 4)先端研事務部男子隊 5)生産研事務部女子隊が参加し、あってはならない火災発生時に効果的な対応を図り、被害を最小限にするための、1・在室者、消防署への通報 2・消火器及び屋内消火栓を使用しての初期消火 3・けが人への応急手当 等制限時間内での基本動作、機敏性が審査され、生産研事務部男子隊、先端研事務部男子隊及び生産研事務部女子隊の3隊が並みいる強豪の中で、日頃の練習の成果を発揮することができ、共に準優勝に値する優秀賞を獲得した。

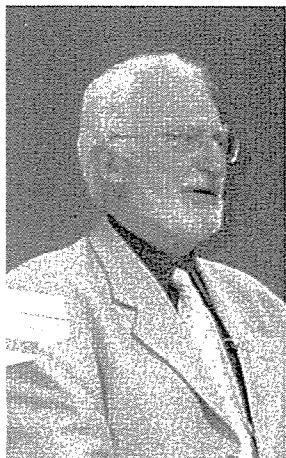


自衛消防活動の様子

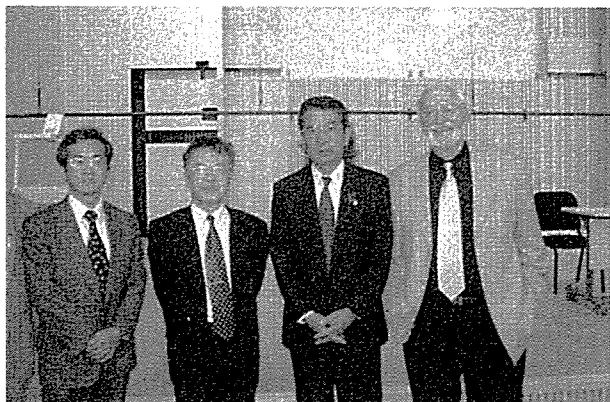
(駒IIキャンパス・生産技術研究所)

物性研究所一般講演会開催される

物性研究所では去る10月5日（土）午後6時50分から、千葉県柏市・柏市教育委員会との共催でアミュゼ柏において、Heinrich Rohrer博士（1986年ノーベル物理学賞受賞）、家 泰弘物性研究所教授の両名による「一般講演会」を開催した。講演会では、IT（情報技術）や材料、環境、バイオなど幅広い領域で科学技術革命あるいは産業革命をもたらすナノテクノロジーについて具体的な事例を交えて話され、講演後活発な質疑応答などが行われた。当日は、開演時間が遅かったにもかかわらず、現代のナノテクノロジーの最前線についての講演ということもあり、約220名が聴講する講演会となった。



Heinrich Rohrer博士



左から、家教授、福山所長、本多柏市長、
Heinrich Rohrer博士

（物性研究所）

空間情報科学研究センター第5回シンポジウム開催される

9月20日（金）に、山上会館において、空間情報科学研究センター第5回シンポジウムが「空間情報科学の研究ネットワーク」というテーマで開催された。空間情報科学研究センター長の岡部篤行教授の挨拶に引き続き、以下の研究発表と招待講演が行われた。

第1部：空間情報科学研究センターの共同研究

1) 空間情報解析部門の共同研究の概要

（空間情報科学研究センター 浅見泰司）

空間情報解析部門の共同研究

- ・鈴木康弘（愛知県立大学）「デジタル観測手法を統合した里山GIS研究」
- ・後藤 寛（弘前大学）「GISを用いた会員制スポーツクラブのエリアマーケティング支援システムの開発」

2) 空間情報システム部門の共同研究の概要

（空間情報科学研究センター 有川正俊）

空間情報システム部門の共同研究

- ・原田 豊（科学警察研究所）「犯罪学とGIS」
- ・塚本昌彦（大阪大学）「ウェアラブルコンピューティングとGIS」

3) 時空間社会経済システム部門の共同研究の概要

（空間情報科学研究センター 城所幸弘）

時空間社会経済システム部門の共同研究

- ・森知也（京都大学）「The self-organizing system in the spatial economy: industrial agglomeration, hierarchical principle, and rank-size rule」

・矢野桂司（立命館大学）「デジタル社会地図の展開」

第2部：招待講演

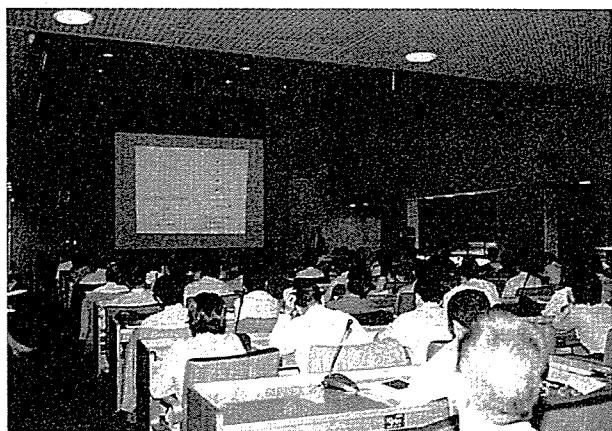
- ・津田順平（㈱コーワー 技術支援部 担当部長）
「ゲームにおける3次元CGとリアルタイムシミュレーション」

第1部では、空間情報科学研究センターの各研究部門が行っている共同研究の簡単な紹介と、いくつかの共同研究の発表がなされた。鈴木康弘氏、後藤寛氏、原田豊氏の発表は、それぞれ、地理情報システム（GIS）を自然環境保護、マーケティング支援、犯罪学に応用したものであり、GISの新機軸を打ち出すものであった。また、塚本昌彦氏は、携帯型コンピュータとGISの親和性が高いことを解説し、自らデモを行い、会場の注目を浴びた。森知也氏と矢野桂司氏の発表は、空間情報科学研究センターが整備してきた空間データを実際に使った研究に基づくものであり、空間データの整備により、これまで困難であった研究が進んでいる実態がうかがえた。

第2部では、㈱コーワー技術支援部の津田順平氏に「ゲームにおける3次元CGとリアルタイムシミュレーション」という題で、実際のゲームのデモをご披露していただきながら、ご講演いただいた。一見すると見逃してしまうようなゲーム中の動きが、実は数式等で科学的

に計算され緻密にプログラムされていることに会場から驚嘆の声が上がっていた。

シンポジウムは、大学関係者、官公庁、民間企業より200名を越す参加があり、盛況のうちに終了後、引き続き多くの方のご出席をいただいて懇親会が催された。



第5回シンポジウム風景



講演を行う岡部センター長
(空間情報科学研究センター)

≤掲示板⇒

御殿下記念館開館利用時間帯について

御殿下記念館開館時間帯の拡大については、かねてより利用者の方から要望が多く寄せられておりました。この間御殿下記念館運営委員会等で検討を進めてきたところですが、下記のとおり「試行」として利用時間帯の拡大を実施することになりましたので、お知らせいたします。

記

実施期間：11月1日（金）～11月30日（土）

開館時間：午前10時30分開館、午後9時30分閉館

現行の開館利用時間は、午前11時30分から午後8時30分となっておりますが、施行期間中は、午前・午後とも1時間づつ、計2時間の延長となります。

平成15年度以降の御殿下記念館の開館時間については、今回の「試行」状況を踏まえて引き続き検討を図りますが、改めてご案内いたします。

スポーツの秋に、設備、スタッフ、運動プログラムともに充実している御殿下記念館をご利用ください。

（学生部）

公開講座「東大病院はどこへ行く～法人化と医療改革前夜の国立大学病院～」

医学部では、国立大学病院の独立行政法人化等の諸問題を検証するため、公開講座を次のとおり開催します。

皆様のご参加を心よりお待ちしています。

日 時：平成14年11月16日（土） 14:00～18:30

場 所：安田講堂

講 演：

「東大病院の課題と展望」

永井良三（東京大学医学部附属病院副院長、循環器内科教授）

「東大病院に期待するもの」

中島正治（厚生労働省医政局医事課長）

「原動力としての法人化：政治的背景とその使い方」

信友浩一（九州大学医学部附属病院副院長、医療システム学教授）

「医療改革・大学改革におけるドイツの大学病院：DRG時代の経営改革と教育研究」

オーバレンダー・クリスティアン（マーティン・ルター大学教授）

「『アメリカ医療の光と影』から何が見えるか
－市場原理が医療に与える影響」

李啓充（作家、元ハーバード大学医学部助教授）

「Reformation of the SNUH-strategic movement toward a preeminent hospital-」

吳秉熙（ソウル大学循環器内科教授・前企画調整室長）

パネルディスカッション：

指定討論者：和田秀樹（医事評論家）

申し込み・連絡先

医学部附属病院総務課

fax 03-5800-8725

e-mail : syomu2@adm.h.u-tokyo.ac.jp

（大学院医学系研究科・医学部）

第23回 東京大学農学部公開セミナー

「食の危機管理」

司会：附属演習林 教授 丹下 健

1) 「農産物の安全な保存へのアプローチ」

生物・環境工学専攻 教授 大下 誠一

2) 「食に危機をもたらす動物の感染症と対策」

獣医学専攻 助教授 遠矢 幸伸

3) 「危機管理におけるリスクコミュニケーションの役割」

農業・資源経済学専攻 助教授 中嶋 康博

日 時 平成14年11月16日（土）午後1時30分～

場 所 農学部 弥生講堂一条ホール

東京都文京区弥生1-1-1

地下鉄南北線 「東大前」下車 徒歩1分

地下鉄千代田線 「根津」下車 徒歩7分

対 象 一般（どなたでも参加できます）

定 員 300名（当日先着順）

参加費 無料

問合せ先 農学系総務課 広報情報処理掛

〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1

電話 03-5841-5484, 8179

主 催 大学院農学生命科学研究科・農学部

共 催 （財）農学会

（大学院農学生命科学研究科・農学部）

コンピュータ・ネットワーク利用セミナーのお知らせ

情報基盤センターでは、コンピュータ・ネットワーク使用セミナー（第30回～第31回）を以下のとおり開催します。本セミナーは、本学の教職員、学生等を対象としたコンピュータとネットワークを適切に利用するために必要な技術等に関する講習会です。また、A T M遠隔講義・会議システムを利用して双方向に中継することで、本郷キャンパスと駒場キャンパスの2箇所で受講できるようにしています。

参加ご希望の方は、受講するセミナーのタイトル（第31回については日時も記入）、受講会場（本郷、駒場）、氏名、所属、電子メールアドレスを明記し、seminar@itc.u-tokyo.ac.jp宛に電子メールでお申し込み下さい。

参加費用は無料です。

なお、参加申し込みが会場の収容人数に達し次第、締め切らせていただきます。

問い合わせ等

seminar@itc.u-tokyo.ac.jp

<http://www.itc.u-tokyo.ac.jp>

索・電子ジャーナルの使い方
などについて、実例に則して解説します。
備考 講師の説明は、本郷側の会場にて行います。
3日間とも同内容で実施します。
当日は講師の日本語の解説に通訳がつきます。
留学生以外の方の参加もお待ちしております。
(情報基盤センター)

(第30回)

タイトル 研究補助者のためのデータベース検索講習

日 時 11月7日（木）13：30～15：00

場 所 (本郷) 情報基盤センター 4F 遠隔講義室
(駒場) 教養学部1号館 2F 163号室

定 員 本郷会場 40名
駒場会場 60名

概 要 研究の補助的業務をされている方を対象に
データベースや電子ジャーナルを使った効率的な文献調査の方法をデモンストレーション
を交えながら分かり易く説明します。

例えば

- ・先生から調査を依頼された文献がうまく探
せない…
- ・Impact Factorの調査を頼まれたけれど…
- ・電子ジャーナルの使い方を知りたい…

などについて、実例に則して解説します。

備 考 講師の説明は、本郷側の会場にて行います。
駒場会場はATM遠隔講義・会議システムを
利用した中継による受講になります。
事務系職員や学生の方の参加もお待ちしてお
ります。

(第31回)

タイトル 外国人留学生のためのデータベース講習

日 時 11月14日（木）14：50～16：20
(英語通訳付き)

11月15日（金）14：50～16：20
(中国語通訳付き)

11月21日（木）14：50～16：20
(韓国語通訳付き)

場 所 (本郷) 情報基盤センター 4F 遠隔講義室
(駒場) 教養学部1号館 2F 163号室

定 員 本郷会場 40名
駒場会場 60名

概 要 論文作成やレポート作成に欠かせないデータ
ベース・ネットワークを利用した最新の学術
情報の収集方法をデモンストレーションを交
えながら分かり易く説明します。

例えば

- ・OPAC、ブックコンテンツ等を利用した蔵
書検索
- ・雑誌記事索引データベース等を使った論文
検索
- ・Web of Science等を使った海外の論文検

≤ 計 報 ≤

藤島 亥治郎 名誉教授

東京大学名誉教授（工学部建築学科）藤島亥治郎先生は、2002年7月15日午後0時30分、ご逝去されました。享年103歳でした。謹んで哀悼の意を表する次第であります。

藤島先生は1899年5月1日のお生まれですから、19世紀から21世紀まで足掛け3世紀におよぶ長いご生涯を送られました。わたくしは曾孫弟子とでもいうべき世代に属しており、とても先生のご生涯の全貌を理解し、ご紹介する力をもちませんが、改めて先生のご業績を振り返らせていただきたいと考えます。

先生は1923年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業され、同年朝鮮総督府京城高等工業学校助教授として赴任され、翌年教授に昇任されました。そして朝鮮総督府技師を兼任されるかたわら、ヨーロッパ留学を果たされました。留学から帰国された翌年、1929年に東京帝国大学工学部建築学科助教授として母校にもどられました。この時期は、1926年には建築史学を専門とする長谷川輝雄助教授が病没、藤島先生の赴任前年に伊東忠太、関野貞という日本・東洋建築史のパイオニアであったふたりの教授が退官され、藤島先生赴任の年に塚本靖、佐野利器両教授が辞められるという大きな変化がありました。そのような状況のなかで藤島先生は建築学科の一員となられたのでした。その後教授に昇任され1960年まで31年の永きにわたって母校で教鞭をとられました。

先生は1933年から終戦まで、朝鮮宝物・古蹟・名勝・天然記念物保存会委員をつとめられ、朝鮮・韓国の建築に関する調査、保存活動をつづけられました。1976年刊の『韓の建築文化』(芸艸堂)は、そうした研究の成果であります。これは10年後に韓国語訳が刊行されました。

日本国内にあっては、中山道宿場の研究、平出遺跡の調査・復原など極めて多くのテーマとフィールドに取り組まれましたが、なんといっても大きなお仕事は平泉遺跡調査会をつくられ、観自在王院跡、毛越寺、中尊寺、さらには柳之御所跡の調査・整備事業であります。



これは先生のご出身が岩手県であるということと関係のある、ふかい郷土愛に結びついたお仕事と感じられます。このお仕事は論文や報告書だけでなく、1995年には『平泉建築文化研究』(吉川弘文館)に大成されております。

そして1956年からは大阪の四天王寺伽藍の再建計画に取り組まれ、現在見られる諸堂を再建設計されました。この業績は1968年に日本芸術院賞恩賜賞と認められました。さらには同じ年、平泉町名譽町民となられるなど、先生の多方面にわたるご業績は各方面から高く評価されました。

このような業績のほかに、先生は1960年代を通じて厚生省自然公園審議会委員として多くの国立公園、国定公園を回られ、自然保護と観光開発にも尽力されています。旅行は研究の必要上の作業であると同時に、先生の楽しみのひとつでもあり活力源でもあったのではないかと推察されます。還暦を過ぎ、古稀を過ぎ、さらには米寿を過ぎてからも、先生は外国へと足を伸ばされ、多くの建築を視察されておられます。こうした視察の印象は、1990年代に出版されています。

執筆、出版への情熱も、先生の大きな特徴であります。専門的論文以外にも、流麗な筆致の隨筆、回想を多く書かれておられます。なかでも1987年刊行の『明治少年記』(住まいの図書館出版局)、1990年刊行の『ヴィタ・ロマンティカ』(柏書房)は貴重な回想記となっています。隨筆集としては、戦前に『匠人談義』(1937年、相模書房)、『瑠璃塔』(1940年、相模書房)があり、戦後も『建築家の手帳』(1948年、酣燈社)、『あかり障子』(1949年、相模書房)、『白寿春秋花なりき』(1997年、盛岡タイムス社)と、晩年にいたるまでつづけられた著作が見られます。

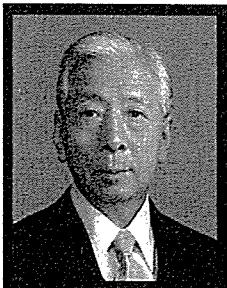
先生のなかには、建築史家であり建築家であり、文化人であるという、人間の総合的なあり方への希求が見いだされるように思われます。そしてその理想を悠々と果たされたのが、そのご生涯であったのだろうと思われるのです。

(大学院工学系研究科・工学部)

本城 和彦 教授

東京大学元教授本城和彦先生は、平成14年8月29日（木）午後4時39分、ご逝去されました。享年90歳でした。先生は、昭和13年、東京帝国大学工学部建築学科を卒業後、逓信省営繕課に入省され、21年戦災復興院技師、27年に建設省営繕局、30年に日本住宅公団へと移られ、昭和40年に東京大学工学部都市工学科の教授に就任されました。この間、35年には、イラン建設銀行へ住宅専門アドバイザーとして出向され、38年には、国連連合住宅建設設計画委員会の日本代表として活躍されました。また、教授のかたわら国際連合地域開発センター（UNCRD）副所長及び、国際開発センター（IDCJ）の理事の要職も務められました。昭和58年には、それまでの先生の高い功績に対し、勲二等瑞宝章を受章されておられます。

本城先生は、ご幼少の頃から何か社会的に貢献したとの志を抱いておられ、戦後の荒廃と焦土化した都市を目の当たりし、さらにその意を強くされたとのことです。戦後間もなく、戦災復興院に移り、経済復興計画の作業や国土総合開発法の立法にたずさわり、また、住宅公団の在職中には、当時の公営住宅規模（2K：12坪）を超えた公団の規模（2DK）を決定し、住宅内の食寝分離型を進めて居住水準を高めるなど、現在の間取りの原型というべきスタイルをつくりあげました。昭和40年の都市工学科の設立と同時に、計画第3講座（住宅部門）を担当され、それまでの実践的経験を教育と研究の現場で大いに生かされました。退官後は、兼任であったUNCRDの所長となり、国連決議に基づき、第三世界の



国々の能力向上のために、研究・研修、情報の交流に貢献をされました。中でもアジア人によるアジア計画（地域計画）の推進を行うために、インドネシア、パキスタン、タイの地域計画をモデルとして人材の育成に尽力されました。

近年、第三世界に対して開発援助の規模が大きく拡大されていますが、先生は、経験的見地から公的援助に頼る姿に危惧を感じられ、あくまでも被援助国が歴史的文化環境に立脚した発想を持ち、自立する能力（人材）を育てるのが良いという信念をもたれておりました。また地域総合計画を立案する方法論を確立する必要を感じられ、UNCRDの勤務を終える昭和56年に10巻のRegional Development Seriesを刊行されました。IDCJに移られても、世界的なプロジェクトである南タイ北部開発に従事され大きな成果を挙げられました。先生は、一見すると猛烈な仕事人間かと見えますが、実は非常に家庭を大事にされる先生でした。また歌が大好きで、ドイツ語や英語で歌うことが度々ありました。先生のいつも笑みをたたえた爽やかな雰囲気は、周りを非常に和やかにするものでした。80歳の時に脳卒中でお倒れになりましたが、奇跡的にそれほどの障害もなく、お嬢様である悠子さまの手厚い看護もあり、今まで、元気にお過ごしました。戦後の焼け跡から、日本が奇跡的な発展を遂げ、さらにはアジアの地域発展のために日本が貢献できるようになったのは、先生のような方々のご活躍があったからであり、先生の訃報に接し、万感迫る思いです。ここに、先生のご功績とお人柄を偲び、衷心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（大学院工学系研究科・工学部）

≤ 広報委員会 ≥

『学内広報』掲載写真の公募

次の要領で、「学内広報」に掲載する写真とその内容の紹介文を、広く本学関係者から募集します。

1. 内 容：東京大学に関するものなら内容は特に問いません。学内点描でも、一般の学内の人達になじみのうすい乗鞍や北海道などの各種施設の状況でも、観測船やスーパー・カミオカンデなどの各種設備の概観でも、電子顕微鏡や高速度瞬間写真などによる珍しい現象でも、なんでも結構です。
2. 形 式：特に問いません。
3. 説明文：500字程度の写真内容を説明する文章をつけて、所属・氏名を明記してください。
4. 締 切：特に設けません。隨時。
5. 掲 載：原則として、表紙に掲載します。
6. 送り先：〒113-8654 文京区本郷7-3-1
東京大学 事務局総務課広報室
03(5841)2031

投書欄「噴水」にご意見を!!

「学内広報」には、皆様から投書を寄せさせていただく欄として、「噴水」が設けられています。この欄への投書要領は、次のとおりです。

- 1 本学における教育・研究活動に関する建設的な意見を述べたものであること。
- 2 個人の投稿で所属・氏名を明記したものであること。
- 3 他者への非難・攻撃を含まないものであること。

以上の要件をそなえるものの中から、広報委員会が適当とするものを、適宜、掲載します。

送り先 〒113-8654 文京区本郷7-3-1
東京大学 事務局総務課広報室 03(5841)2031

EU、ティコ・ブラーイ、憲法

7月11日、衆議院憲法調査会に呼ばれた。「EU憲法制定の動きと各国憲法」というテーマで意見を40分開陳し、引き続き議員との質疑応答。予告のない質問に即答を迫られること100分。熱いワインブルドンだった。サーブは全部なんとか相手コートに打ち返したが、剛球、クセ球数多く、60点くらいの出来栄えに思えた。

ところが二週間後に驚いた。「議事録」が送られてきて知ったのだが、私が委員会室を退席して議員同士の自由討議になったとき、複数の議員が、見事に私の意図を汲んでいた。
「我々、憲法論を論じるときに、国民国家としての日本の枠の中でしか…物事を考えない傾向が…あるわけです。…世界連邦的発想と、…国民国家…へ拘泥をし続けるという考え方とがある中で、その中間にリージョンステートともいべきEUのような存在というものが【ある】。…それは、国家権力もしくは国民国家の力が衰えるということではなくて、本来、国民国家として持っている、人々の幸せのために、また平和のために果たそうとする役割を新しい形でフォローしていくシステムなのではないか。…日本の場合にも、それらのことを踏まえた新し

い時代の憲法感覚…を…持っていくべきなのではないか…」

かつて駒場で科学史を習ったとき、火星などの逆行現象を天動説で説明するために「周転円」

を加える技巧があったと知った。

ティコ・ブラーイが精緻な観察を通して天動説を疑いつつも捨て切れなかつたことも。EUは前代未聞の実験だ、と私は常々主張している。国民国家を単位とする（国内・国際）法学の視座と概念を使い、「周転円」を加えてEUを説明することも可能だろう。しかし、

やがてコペルニクスが登場し、同じ現象を別のモデルと概念で説明する時代が来るだろう。だが「憲法」という言葉は、新たなモデルと概念体系の下でも、燐然と輝く太陽であるだろう。ヨーロッパの各国語では、そもそも国民国家に一対一対応する言葉ではないのであるし。

コペルニクスになるか、ティコ・ブラーイで終わるかは分からぬが、だれかが無謀とも思える思考を続けなければならない。学際的な雰囲気で極限まで考え、討議できる大学の場は貴重だ。そして根本を問い合わせることが、日本の今後のあり方にも通じることを経験できて、本当にうれしい。根底をめざすことから現在に視座をあたえる。このようなスタイルの研究が陽の目を見るほどに、日本も変化の途上にあるのだろう。

(社会科学研究所助教授・中村民雄)

(淡青評論は、学内の職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

◇広報室からのお知らせ

平成14年度「学内広報」の発行日及び原稿締切日を、東京大学のホームページに掲載しました。

URL : <http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/soumu/soumu/kouhou.htm>

〔訂正〕

「学内広報」No1246 (2002. 9. 26) 8頁において一部誤りがありましたので、訂正してお詫びいたします。

(誤) 志立託爾氏 (三菱銀行最高顧問) → (正) 志立託爾氏 (三菱信託銀行最高顧問)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

東京大学文書館

000962



No 1248

2002年10月23日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務課広報室 ☎ (3811) 3393

e-mail kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>